

令和 5 年 6 月 20 日現在

機関番号：80101

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2021～2022

課題番号：21K20005

研究課題名（和文）アイヌ語における存在型アスペクト形式の方言間の異同

研究課題名（英文）Dialectal Differences in Existential Aspectual Forms in Ainu

研究代表者

吉川 佳見（Yoshikawa, Yoshimi）

北海道博物館・研究部・研究職員

研究者番号：30908075

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 700,000円

研究成果の概要（和文）：アイヌ語静内方言における存在型アスペクト形式kane an、wa an、hine anを分析対象とし、沙流・千歳方言のケースと比較検討することで、方言間のアスペクト形式の意味範疇の差異を調べた。結果、静内方言のkane anの用法が、沙流・千歳方言のkor anのみならずkane anとも共通していることを指摘した。また、静内方言のwa anおよびhine anに、沙流・千歳方言同様、脱アスペクト的な用法があることを指摘した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

アイヌ語北海道諸方言は大きく南西部と北東部に二分されるが、アイヌ語静内方言はその方言境界に位置するものであり、今回の比較検討の成果はアイヌ語の方言体系やアスペクト体系解明の一助となることが期待される。

研究成果の概要（英文）：This study discusses the usage of the existential aspectual forms KANE AN, WA AN, and HINE AN in the Shizunai dialect of Ainu with comparisons to the Saru and Chitose dialects. The results show that KANE AN in the Shizunai dialect is sometimes equivalent to KANE AN as well as KOR AN in the Saru and Chitose dialects. For WA AN and HINE AN, non-aspectual usage was also found in the Shizunai dialect.

研究分野：言語学

キーワード：アイヌ語 アスペクト 存在動詞 静内方言 沙流方言 千歳方言

### 1. 研究開始当初の背景

時間にかかわる文法範疇として、テンスとアスペクトがある。テンスは、ある事態の生起がいつであるかを表し、アスペクトはその事態内部の時間的な局面を表す。

本研究の対象とするアイヌ語は、テンスを持たない言語とされ、事態がいつ発生したかを動詞の語形変化によって表すことはない。アスペクトについては、使用は義務的ではないものの、アスペクト的意味を表現する様々な形式がある。中でも、アイヌ語の各方言において「接続助詞 + 存在動詞 an」の構文が、日本語のテイル形に相当するアスペクト的意味を表わすことが指摘されてきた。しかし例外的な事象も多く、課題が残されてきた。これまで申請者はアイヌ語の「接続助詞 + 存在動詞 an」構文を「存在型アスペクト形式」と位置づけ、アイヌ語沙流・千歳方言の存在型アスペクト形式の意味機能について研究してきた。それを踏まえ、本研究では、アイヌ語静内方言における存在型アスペクト形式の意味機能を分析し、沙流・千歳方言との比較対照を行なうこととした。

### 2. 研究の目的

静内方言は、十勝方言などの北海道北東部のアイヌ語諸方言と、沙流・千歳方言などの南西部諸方言の方言境界に位置するとされ、語彙・文法的に沙流・千歳方言と異なる側面を持つ。先行研究では、静内方言の kane an は沙流・千歳方言の kor an に相当し、動作継続、変化の進行を表すとされている。また、静内方言の wa an は沙流・千歳方言の wa an に相当し、変化の結果継続を表すとされている。

しかし、静内方言の kane an には沙流・千歳方言の kane an にも相当するような用法もあり、また、静内方言の hine an の用法についてはほぼ先行記述がないなど、検討の余地が残されていた。そこで本研究ではアイヌ語静内方言を対象とし、静内方言における存在型アスペクト形式 (kane an、wa an、hine an) の意味機能を分析したうえで、沙流・千歳方言の kor an、wa an、hine an と比較対照を行なうことを目的とした。

### 3. 研究の方法

本研究の遂行にあたり、まずアイヌ語静内方言のアスペクトに関する先行記述をまとめた。次に、静内方言の kane an、wa an、hine an の用例収集を行い、各アスペクト形式と共起する動詞を調べた。なお、アイヌ語は近年の急激な話者数の減少から、とくに言語的なインタビュー調査はほぼ不可能となっているため、本研究ではインタビュー調査は行わず、公刊済みの文献資料や web 上のアイヌ語アーカイブ掲載テキスト資料などから用例収集を行った。収集したデータをもとに、各形式の意味機能を分析し、得られた結果を沙流・千歳方言と比較した。

### 4. 研究成果

本研究の成果は論文「アイヌ語静内方言の存在型アスペクト 沙流・千歳方言との比較から」(『北海道博物館アイヌ民族文化研究センター研究紀要』第8号、pp.1-19、2023年3月発行)としてまとめた。各方言における存在型アスペクト形式の基本的な意味範囲は、下の表のようになる(同論文 p.16 より引用)。

	沙流・千歳	静内
kor an	動作継続 変化の進行過程 習慣的動作	(なし)
kane an		動作継続 変化の進行過程 習慣的動作
	変化の結果継続 単なる状態、属性	
wa an、hine an	変化の結果継続 単なる状態	

これまで静内方言の kane an の用法は沙流・千歳方言の kor an に相当するというのが定説であり、一方で、静内方言の kane にも沙流方言の kane の用法と共通する用例も 1 例先行研究で指摘されていたが、本稿において、静内方言の kane an が沙流・千歳方言の kane an にも相当する可能性があることが複数例によって示された。

静内方言の wa an は沙流・千歳方言の wa an 相当であることが既に明らかにされていたが、本稿では「状態性動詞 + wa an」の脱アスペクト的な用法が静内方言にもあることを指摘した。

hine an は静内方言ではアスペクト形式として取り上げられて来なかったが、本稿では静内方言の hine an が wa an とほぼ同様に変化の結果継続を表すこと、また、wa an の事例同様に脱アスペクト的な用法があることを指摘した。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 1件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 吉川佳見	4. 巻 -
2. 論文標題 アイヌ語静内方言の存在型アスペクト 沙流・千歳方言との比較から	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 北海道博物館アイヌ民族文化研究センター研究紀要第8号	6. 最初と最後の頁 1-19
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計0件

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------